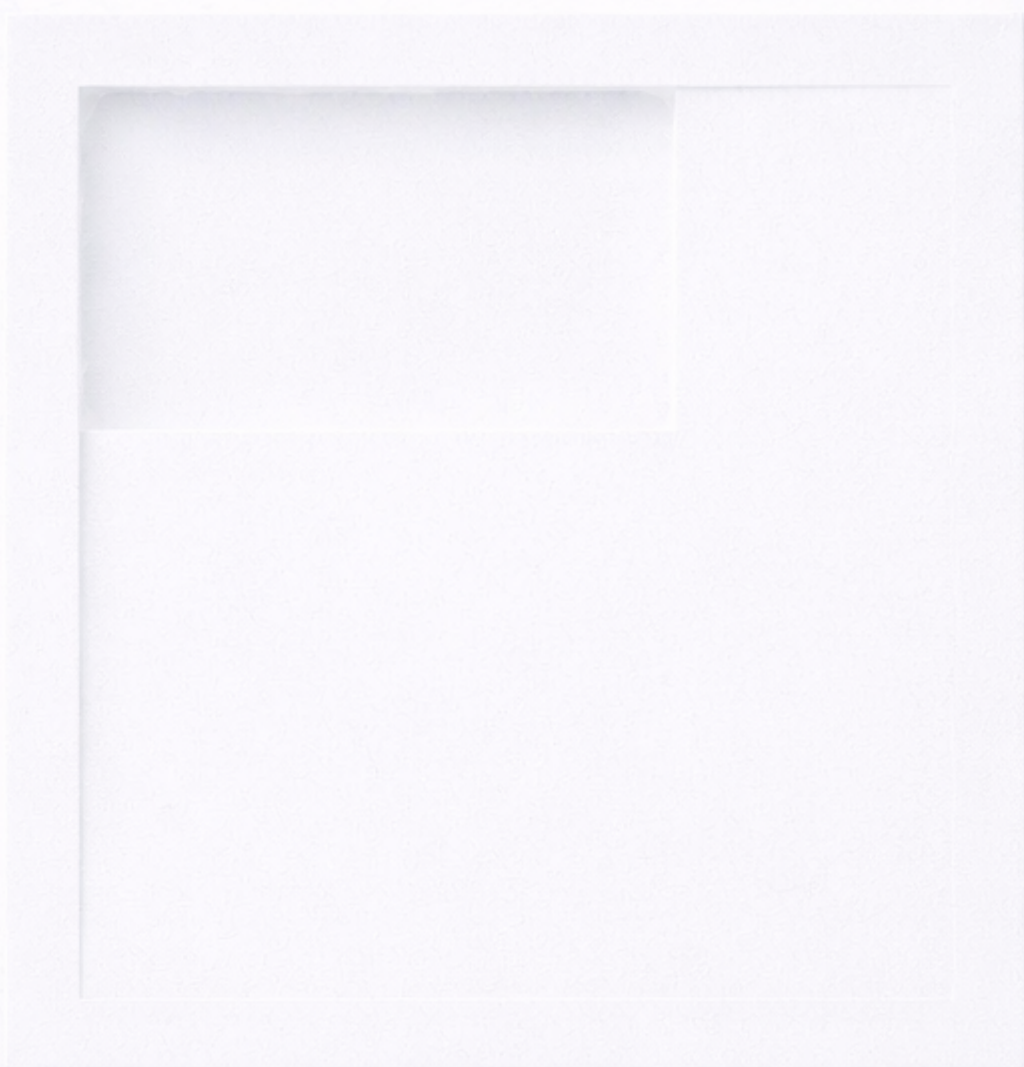




七割の自己、百二十の他者

自分にだけ、完成形を課す構造。

十分だと言われても、
基準は動かない。

判断は、内側ではなく、
少し離れた場所に置かれている。

これは、謙虚さの話ではない。

自信の欠如でもない。
努力不足の結果でもない。

評価基準の置き方によって、
認知の輪郭がずれているだけだ。

初期の段階で、
理想像がひとつ固定される。

まだ届いていない状態が、
基準として居続ける。

他人を見るときには、
別の基準が使われている。

途中であること。
揺れていること。
未整理であること。

それらは、そのまま通過できる。

気づくと、
評価はこうなっている。

自分にとっての七割は不足になり、
他人にとっての七割は十分になる。

到達として認められるのは、
いつもその先だけにある。

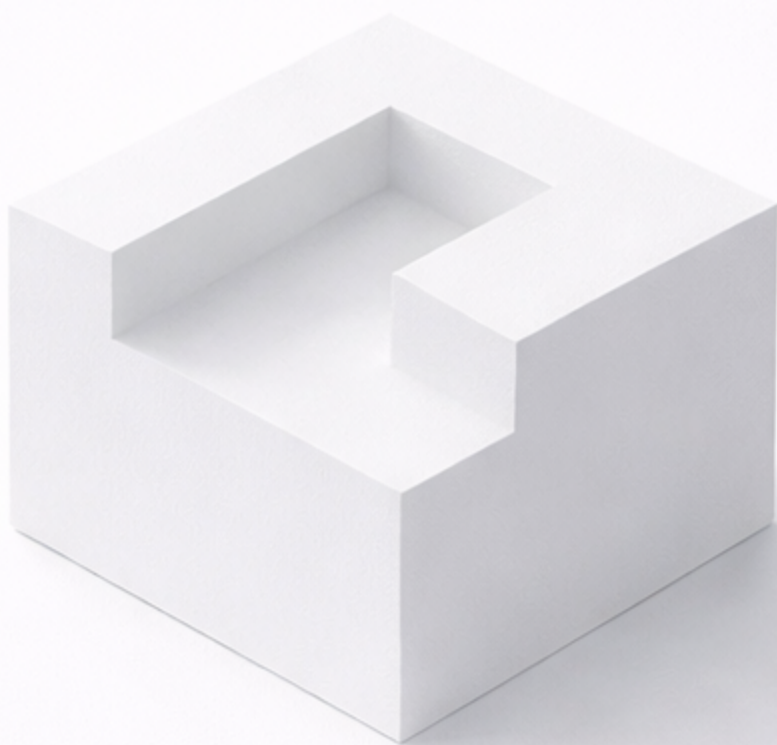
この構造は、
誠実さと、遅れを同時に生む。

精度が上がるほど、
肯定のタイミングは後ろにずれる。

積み上げているものと、
否定しているものは、
同じ場所から出ている。



満足は、
いつも外側にある。



Edition — 存在の芯
別景：七割の自己、百二十の他者

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026